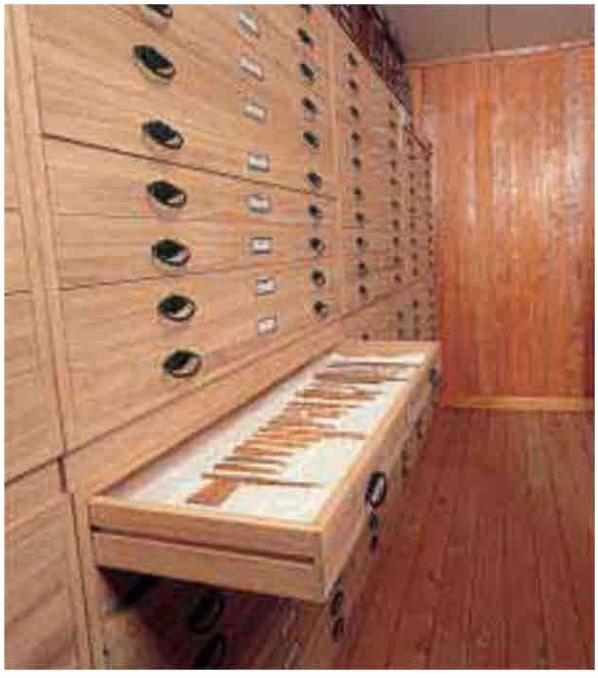
奈文研ニュース
2003.Jul No.9
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp

平城宮木簡、重要文化財に指定

今年5月、平城宮第1号木簡を含む平城宮跡大膳職推定地出土木簡39点が、出土文字資料として初めて国の重要文化財に指定されました（見開き参照）。平城宮跡は国指定の特別史跡で、地下に埋もれた文化遺産として唯一ユネスコの世界遺産に登録されたかけがえのない遺跡です。これまでの50年に及ぶ平城宮跡の発掘調査で見つかった遺物としても、今回の重要文化財指定は初めてのことです。

今回指定された木簡は、1961（昭和36）年と1962年に見つかりました。その後40年余りの間に奈文研が平城宮跡の調査で取り上げた木簡は約5万点、全国でも800近い遺跡から20万点以上の木簡が見つかっていますが、当時はまだ木に墨で文字を記した生の史料―木簡―が大量に地中に埋もれているなどとは想像もつかないことで、「もっかん」と聞いてたいていの人は「木棺」を思い浮かべる、そんな時代でした。この間、木簡は平城京内にもたくさん眠っていることが明らかになりました。平城宮の東南に隣接する奈良時代前期の左大臣長屋王の邸宅とその周辺から、長屋王家木簡・二条大路木簡計約11万点が出土したのはまだ記憶に新しいところです。


保存処理木簡収納状況

今回の指定で注目すべきことがもう一つあります。それは、平城宮内の大膳職という一つの役所の跡から見つかった木簡を、一括して指定していることです。木簡は完全な形で見つかるものは少なく、破片や削屑（木簡の再使用の際に小刀で削り取られたカンナ屑状の細片に文字の残るもの）の形で見つかるものがほとんどです。ですから木簡のもつ情報量に多い少ないはありますが、それらが一緒に見つかることが重要で、木簡としての価値には差がなく、私たちは完全な形の木簡も、文字の一部が残るだけの削屑も平等に扱って一点に数えています。今回の指定では、こうした考え方に則って、情報量の多い木簡、書かれている内容が重要な木簡だけを選別するのではなく、一緒に見つかった木簡を一括して指定した点にも画期的な意義があるのです。

木簡は、地下水に守られながら土中にパックされ、日光と空気から遮断された状態で初めて1200年残ってきたものです。そのため、見かけはしっかりしていても、なかはスカスカの状態になっているものもあり、乾燥は致命的です。そこで奈文研では木簡を守ってきた水を安定した樹脂に置き換えて保存処理をおこなう技術を開発してきました。今回指定された木簡も保存処理によって安定した状態になり、指定が可能になりました。

今回指定された木簡は、奈文研全体の木簡約18万点からみればごくわずかです。これらを守り後世に伝え、そのデータを公開していくことが私たちの責務であると考えています。今回の重要文化財指定が、木簡に対する理解を一層深める契機となればと思っています。　（平城宮跡発掘調査部　渡邉晃宏）